

看護学生が統合実習で得た自己の課題

石井 あゆみ^{1*}・藤田 和加子²・徳珍 温子²

¹千里金蘭大学・²大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Problems Faced by Student Nurses in the Integrated Practicum

Ayumi Ishii¹, Wakako Fujita² and Atsuko Tokuchin²

¹Senri-Kinran University and ²Osaka Shin-Ai College, Japan

看護基礎教育における統合実習では卒業後に臨床の場でスムーズに適応するために、チーム医療の中でメンバーシップやリーダーシップについての学びや、看護管理や医療安全などについて学ぶことを目的としている。本研究では統合実習のよりよい教育指導のために、統合実習の目的がどのように達成されているのか知ることを目的とした。A 短期大学で統合実習を終了した3年生のうち同意を得た47名の実習記録の「残された課題」として記録している部分をKH-Coderで分析した。総抽出語数は3892語、使用語数は1609語であった。階層的クラスタリングを行い【課題は情報共有】、【報告連絡相談の判断の理解不足】、【看護チームでの自分の知識】、【看護提供をリーダーへ報告】、【優先順位の達成】、【メンバー間の行動など全体の管理】の6つのクラスターを得た。統合実習では、領域別実習以上に臨床の看護師や管理者と共に行動する機会が多く、臨床に近い体験ができ多くの助言が得られたため、患者に関わるチームで医療を行っていることや、時間の管理など実際に働くときのことをイメージすることができた。A 短期大学統合実習後の自己の課題は、相手に分かりやすく伝えるコミュニケーションの重要性や情報の取捨選択の必要性であった。就職後は多くの不安があり、統合実習だけで臨床への準備ができたとは言えないが、気づいたことを発表し共有することで自己の成長を自覚し、専門職としての責任を自覚できることが示唆された。今回の結果から、統合実習における学生の課題についてその都度自身で解決するための方法が見いだせるように、教員が教育指導することの重要性が示唆された。

キーワード：統合実習・チーム医療・自己の課題・看護学生

1. 緒言

看護基礎教育における臨地実習では、学内での学習を終えた看護学生が、一人の患者を受け持ち、看護展開の指導を受けながら自らが考えた看護援助を実施していく。しかし、実際の臨床では複数の患者を受け持ち、優先順位を考えながらチームメンバーの一員として看護を提供する。卒業後に臨床との差を小さくする目的で、2009年度のカリキュラムで新たに統合分野が設けられ、看護の統合と実践の実習（以下統合実習と略す）が実施さ

*千里金蘭大学

吹田市藤白台5丁目25番1号

TEL: 06-6872-0673, FAX: 06-6872-7309

E-mail: a-ishii@cs.kinran.ac.jp

受付：2019年6月25日 受理：2019年9月2日

©2019 大阪信愛学院短期大学

れることとなった。統合実習では、卒業後に臨床の場でスムーズに適応するために、チーム医療の中でメンバーシップやリーダーシップについての学びや、看護管理や医療安全などについて学ぶことを目的としている。具体的な実習内容は各学校の裁量に任されている部分が多く、複数患者の受け持ちや看護管理実習など、領域実習とは違い臨床で働くことを体験できる工夫をしている。

統合実習に関する先行研究で畠山ら[1]は、看護師長やチームリーダー実習を経験することで、報告連絡相談の必要性を学び、チーム医療の在り方に理解を深め、これから看護師として働く自分の姿をイメージでき、より明確に理想とする看護師像を描くことができるもの、また、学んだことは基礎的な知識・技術の応用の体験、全人的視点の看護を目指す動機づけ、自己を成長させる機会とも述べている。しかし、別所ら[2]の就職後の不安解消につながるとは思わないと述べているものもあった。

A 短期大学で統合実習は、「看護基礎教育（臨地実習）と卒業後の看護師としての実際の仕事をつなぐ実習である。各領域の実習で学習してきた看護を統合して、実践に近い形で実習する。4か月後に新人看護師としてデビューするための準備実習である。」と位置付けられている。看護学生として臨む臨地実習がすべて終わり、次は臨床の場で看護を行うことを意識して、実習の学びや自己の課題を実習記録にまとめる。最後にまとめた自己の課題からは臨床で働く自分自身をどのようにイメージし、臨床の場で働く上で何を課題としたのかを知ることができる。

そこで、統合実習の目的が十分達成されるために、そしてそのための効果的な教育指導を考えるための必要な情報として、本研究は、学生の統合実習で得た学びと今後の課題を知ることを目的とした。

2. 研究方法

2.1. 研究期間

平成 28 年 11 月から 12 月

2.2. 研究対象

A 短期大学で統合実習を終了した 3 年生 72 名の内、同意が得られた 47 名 (65.3%) である。

2.3. 統合実習の概要

統合実習は「看護基礎教育（臨地実習）と卒業後の看護師としての実際の仕事をつなぐ実習（略）4か月後に新人看護師としてデビューするための準備実習である」と位置付けられており、実習の目的は「保健・医療・福祉にかかわるさまざまな職種の人々がお互いの役割と責任を担いながら、総合的な視点から患者を中心としたチームケアを行っている。保健・医療・福祉のチームを通して看護を提供する方法や病院における看護管理の実際を学び、チーム

の一員として行動するための基礎的能力を養う。」である。また、実習単位は 90 時間 2 単位である。一日の実習時間は一つの勤務帯を経験できるよう午前 8 時 30 分の朝の申し送りから、夕方の勤務者に申し送るところまでの 17 時ごろまでである。実習の内容はまず、学生それぞれが受け持ち患者を担当し、病棟のケア計画に従い、援助を実施する。そしてチームリーダーの役割を学ぶリーダー実習、看護師長について看護管理について学ぶ管理実習を経験する。リーダー実習や管理実習中の学生が担当している受け持ち患者は、リーダー実習や管理実習を行っていない学生が自分の受け持ち患者と共に複数（2 名）を受け持ち、援助の優先順位を考えメンバーとしての役割を学ぶ実習を経験する。実習における日程表の一例を表 1 に示す。

2.4. 分析方法:A 短期大学で統合実習を履修した看護学生の実習記録の中にある統合実習の学びについて最終日に記録する「残された課題」の項目を分析対象とした。記述された内容で、意味が同じと思われるものは語を統一した後にフリーソフトウェア KH-Coder を使い、頻回に出現した語を頻出語としてリスト化し分析を行った。

2.4. 倫理的配慮

研究参加を対象者の自由意思に基づくものであり、随時同意を撤回することが可能であること、その場合でも何ら不利益を被ることはないこと個人情報は個人が特定されないように守秘し、研究及び学会発表後はすべての情報を破棄することを口頭と書面にて説明した。なお本研究は大阪信愛女学院短期大学倫理審査委員会承認を得た。本研究発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

3. 結果

A 短期大学で統合実習を終了した 3 年生で同意を得た 47 名の実習記録の「残された課題」として記録している部分を KH-Coder で分析したところ、総抽出語数は 3892 語で使用語数は 1609 語であった。出現回数が 5 回以上の語の数が 51 語であった。これを頻回に出現している、つまり対象学生の多くが記録に記入している語で頻出語として表 2 に示す。次に階層的クラスタリングを行ったところ 6 つのクラスタを得た。

以下より抽出語を「 」で、クラスタ名を【 】と表記する。

クラスタ 1 は「情報」「共有」「必要」「今後」「課題」「実習」を含むので【課題は情報共有】とした。「情報」が 38 回出現しており、その前後には「共有」「必要」が続く。実際の文章では「患者に統一した看護を行うためにも情報を事前に把握しておく必要があった。」や「メンバー間で情報共有が不足していた。」や「必要な情報の取捨選択」などがあった。

クラスタ 2 は「報告」「連絡」「相談」「理解」「不足」

表 1 統合実習日程表一例

| | 学生A | 学生B | 学生C | 学生D | 学生E |
|------|--|-------------------|----------|----------|----------|
| | (月) ・病院・病棟オリエンテーション、学生対象に看護師長より看護管理について説明を受ける。 | | | | |
| 一週間目 | (火) | メンバー | メンバー | メンバー | メンバー |
| | (水) | リーダー実習 | 管理実習 | 複数患者受け持ち | メンバー |
| | (木) | 複数患者受け持ち | リーダー実習 | 管理実習 | 複数患者受け持ち |
| | (金) | 学 内 学 習 日 | | | |
| 二週間目 | (月) | メンバー | 複数患者受け持ち | リーダー実習 | 管理実習 |
| | (火) | 複数患者受け持ち | メンバー | 複数患者受け持ち | リーダー実習 |
| | (水) | 管理実習 | 複数患者受け持ち | メンバー | 複数患者受け持ち |
| | (木) | メンバー | メンバー | メンバー | メンバー |
| | (金) | 学 内 で ま と め ・ 発 表 | | | |

表 2 頻出語 50 語

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|------|------|------|------|-----------|------|
| 患者 | 53 | 伝える | 16 | コミュニケーション | 6 |
| 考える | 47 | 把握 | 16 | 見る | 6 |
| 情報 | 38 | チーム | 15 | 自己 | 6 |
| 行う | 33 | 連絡 | 14 | 受け持ち | 6 |
| 自分 | 33 | 状態 | 12 | 全体 | 6 |
| 必要 | 30 | 受け持つ | 11 | 達成 | 6 |
| 報告 | 28 | 思う | 10 | 知識 | 6 |
| 援助 | 23 | 持つ | 10 | 意識 | 5 |
| メンバー | 22 | リーダー | 9 | 学ぶ | 5 |
| 看護 | 21 | 不足 | 9 | 感じる | 5 |
| 共有 | 21 | 複数 | 9 | 言う | 5 |
| 実習 | 21 | 優先 | 9 | 行える | 5 |
| 今後 | 18 | 学生 | 8 | 自身 | 5 |
| 課題 | 16 | 管理 | 7 | 人 | 5 |
| 行動 | 16 | 関わる | 7 | 提供 | 5 |
| 時間 | 16 | 順位 | 7 | 判断 | 5 |
| 相談 | 16 | 分かる | 7 | 理解 | 5 |

表 3 クラスタ分析の結果

| クラスタ 1 | クラスタ 2 | クラスタ 3 | クラスタ 4 | クラスタ 5 | クラスタ 6 |
|------------|----------------|--------------|----------------|---------|-----------------------------------|
| 課題は情報共有 | 報告連絡相談の判断の理解不足 | 看護チームでの自分の知識 | 看護提供をリーダーへ報告 | 優先順位の達成 | メンバー間の行動など全体管理 |
| 今後課題共有情報必要 | 理解不足連絡相談報告判断 | 看護チーム自身知識自己 | 意識リーダー提供受け持ち学生 | 優先順位達成 | 時間複数管理全体コミュニケーション把握状態援助患者メンバー自分行動 |

「判断」を含むので【報告連絡相談の判断の理解不足】とした。「報告」が 28 回出現しており、「報告・連絡・相談」として用いられていることが多かった。その他「次にどうするかを含めた報告」や「自分で訪室して確かめたいうえで報告できるスキル」、「誰が聞いてもわかりやすいように報告する力」、「日ごろから報告連絡

相談を行いながら自分の判断力を養うことが必要」などがあった。

クラスタ 3 を「看護」「チーム」「自身」「知識」「自己」を含むので【看護チームでの自分の知識】とした。「看護」が 21 回出現し「メンバーで看護していることを念頭に置き」や「自己の基礎看護知識を高めるよう

にしていく」、「自己の看護の学習を高めていきたい」などがあった。また、統合実習の目的に挙げているチーム医療について記述されていると思われる「チーム」は15回出現しており、「チーム間で受け持ち患者の情報交換、連絡調整を行い」や「チームの一員として行動できるよう」「チームで看護行うにあたって自覚が大切」などがあった。

クラスタ4は「リーダー」「提供」「意識」「受け持ち」「学生」を含むので【看護提供をリーダーへ報告】とした。「リーダー」は9回出現し、「リーダーや他学生に伝えることが必要」や「メンバーやリーダーへの積極的な声かけや意思疎通が患者のため」といったメンバーの立場から記述されたものと、「リーダーとして全体を把握する」や「リーダーとして誰が聞いてもわかりやすいように報告する必要がある」、「リーダーとして様々な職種と連携を図るためにコミュニケーションスキルの大切さ」などリーダー実習での学びや課題を挙げていた。

クラスタ5は「優先」「順位」「達成」を含むので【優先順位の達成】とした。「優先」は9回出現し「優先順位を考え報告できる」や「どのような状態を優先するべきなのかをしっかりと振り返り」があった。

クラスタ6は「時間」「複数」「管理」「全体」「コミュニケーション」「把握」「状態」「援助」「患者」「メンバー」「自分」「行動」を含むので【メンバー間の行動など全体の管理】とした。本研究の分析対象の中で「患者」が53回と一番多く出現している。本研究の目的である自己の課題として何を「把握」し、どんな「行動」が課題として記述されたのかを確認した。まず、「把握」では出現回数は16回で、「患者の経過」や「統一した看護を行うため」に「情報の把握が必要」があった。また「メンバー間の随時状態の把握」や「リーダーとして全体の把握」、「時間の把握」など患者だけではなくメンバー間の相互の動きや援助にかかる時間の把握といった記述があった。次に「行動」は出現回数が16回で、「わからない時は行動する前に確認する」、「優先順位を決めて行動する」、「根拠をもって行動する」「余裕をもって行動できるよう時間管理する」があった。クラスタ分析の結果を表3に示す。

4. 考察

クラスタ1【課題は情報共有】について考察していく。領域実習では自分で受け持っている受け持ち患者についてメンバー間で多くの情報を共有していなくても、臨地実習の学習は成り立っていた。しかし統合実習では複数の患者を受け持ち、優先順位を考えると自分は自分がいつもは担当していない患者について情報が伝わっていないと、優先順位を決める根拠があいまいとなる。そこでその日の援助に必要な情報を共有する

必要があり、伝えたいことの内容を絞り、わかりやすい言葉で相手に伝える必要があると気づき課題であると認識されたと推察できる。クラスタ5の【優先順位の達成】として観察した患者の状態の報告や、チームとして自らの行動の順番するときなど、何を優先するのが良いのかなどの判断するときに必要な課題であると捉えられている。臨床の場で看護師として働くということは自分一人で行動するものではない。統合実習ではチームで看護を行うことや、リーダー実習で患者のためには今、何が一番優先されることか他職種と連携する場面の体験を通して臨床の場で働くことを想像し、今までの学習では不十分であると感じたのではないかと考える。

クラスタ2の【報告連絡相談の判断の理解不足】では、誰に何を相談し、どのような内容を報告し、連絡すればよいのかが、理解判断することが難しく課題と認識されたと考える。クラスタ4の【看護提供をリーダーへ報告】でも、リーダーやメンバーの立場で報告するには、コミュニケーションスキルが不足していることに気づき課題に挙げていると考える。他職種との連携を意識した課題では、クラスタ3の【看護チームでの自分の知識】から、チーム医療を行う上で今まで行ってきた領域実習より、チームの中で行動している自らの行動を意識でき、知識や技術が不足していると感じ、課題と挙げていると推察できる。相手に分かりやすく伝えるコミュニケーションの重要性や情報の取捨選択の必要性に気づきがあった。本村と八代[3]は、職場での対人関係の葛藤や看護における不全感を抱くことがバーンアウトの要因の一つであり、また看護職のアイデンティティが十分でない経験年数の少ない看護師にその傾向が高いことを述べている。A 短期大学の統合実習において「看護基礎教育（臨地実習）と卒業後の看護師としての実際の仕事をつなぐ実習である。各領域の実習で学習してきた看護を統合して、より実践に近い形で実習する。4か月後に新人看護師としてデビューするための準備実習である。」と位置付けは、新人看護師となった後に抱くであろうコミュニケーションの重要性と困難さを体験し、解決へ繋げる思考を疑似体験させることができたのではないかと推測する。

クラスタ6は【メンバー間の行動など全体の管理】で自己の課題として何を「把握」し、どんな「行動」が課題として記述されたのかの結果より、自分だけでなくメンバーの行動を把握して行動することに難しさを感じている。そして臨床の場で働くときには、情報共有に必要性やコミュニケーションをとって、時間や全体を把握して行動できることを課題としている。

統合実習では、領域別実習以上に臨床の看護師や管理者と共に行動する機会が多く、臨床に近い体験ができ多くの助言が得られたため、患者に関わるチームで医療を行っていることや、時間の管理など実際に働く

ときのことをイメージすることができた。本村と八代[3]が、臨床への肯定的なイメージを持ちながら統合実習の目的が達成できるよう臨床と連携し、環境づくりを行っていく必要があると述べられている通り、統合実習における環境づくりは重要であると考えられる。就職後は多くの不安があり、今回の結果だけで臨床への準備ができたとは言えないが、三井ら[4]が述べている、気づいたことを発表し共有することで自己の成長を自覚し、専門職としての責任を自覚できるとあるように統合実習で得られた課題に対して、教員が逐次フィードバックし、課題解決のための方法が見いだされるような教育指導を行うことが重要であると示唆された。

5. 結論

A 短期大学統合実習後の学びや自己の課題は、相手に分かりやすく伝えるコミュニケーションの重要性や情報の取捨選択の必要性であった。

統合実習では、臨床の場に近い体験ができたことで、チームで患者に関わるという実感が持て、チームの中で働く自分の姿をイメージすることができた。

気づいたことを発表し共有することで自己の成長を自覚し、専門職としての責任を自覚できるようになることが示唆された。

教員は、学生の課題についてその都度自身で解決できるような方法を見出せるように教育指導を行う重要性が示唆された。

謝辞：この研究をまとめるにあたり、ご協力いただきました A 短期大学看護学生の皆様、ご指導くださいました先生方に感謝申し上げます。

なおこの研究は、第 48 回（平成 29 年度）日本看護学会、看護教育領域で示説発表したものを追加修正いたしました。

文 献

- [1] 畠山禮子, 福岡裕美子, 新田純子 他：看護総合臨床実習（成人）における学生の学び. 弘前学院大学紀要 8, 47-51 (2013)
- [2] 別所史恵, 平野文子, 三島三代子 他：総合実習における看護学生の目標達成状況と課題. 日本看護学会論文集：看護教育 43, 74-77 (2013)
- [3] 本村良美, 八代利香：看護師のバーンアウトに関連する要因. 日本職業・災害医学学会誌 58(3), 120-126 (2009)
- [4] 三井督子, 小川純子, 伊藤奈津子 他：総合的な臨床実習が、看護学生の自己教育力に及ぼす要因. 淑徳大学看護栄養学部紀要 8, 87-97 (2016)

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編
